

自転車乗り

巡査 止まれ！

(カール・ファレンティンはまぶしそうにまばたきをしながら巡査を見つめる)
巡査 何がそんなにまぶしいのかね？

KV 巡査殿の聡明さがまぶしいもので、雪めがねをかけなきゃならんくらいです。

巡査 君は警笛をそこにつけておるが、自転車はベルをつけなければならんのだ。警笛をつけていいのは自動車だけだ。なぜなら、自動車は警笛を鳴らしてはいけないからな。

KV (警笛のゴムボールを押す) この警笛は鳴らないんです。

巡査 鳴らない警笛など、意味がないだろう。

KV いやいや 声を出しますから。あのですね、合図が必要な時には「注意！」ってどなるんです。

巡査 それから君は後ろの車輪のところに白線を引いておらんな。

KV いえ、引いてあります。(ズボンを示す)

巡査 それに後部反射板もついておらんぞ。

KV いえ、あります。(ポケットの中を探る) ほら、ここに。

巡査 どうしてポケットの中に入ってるんだ これはその後ろにつけるものだろう。

KV (ズボンに押しあてる) ここですか？

巡査 ちがう 後ろの車輪の上だ 本官の見たところ、これは重荷用車両のようだが れんがを積んでおるな、家を建てるのかね？

KV 家を建てる？ 私が？ いいえ！ 何で私が家を建てなければならんのです？ もうこんなにはたくさん建っているというのに。

巡査 それなら、どうしてこんな重たいれんがを自転車に積んでおるのかね？

KV 向い風の人に楽に走れるようにです。きのうの朝、強い風が吹いてましたよね、その時、れんがを載せてなかったんですよ。そうしたらゼンドリングに行くつもりだったのに、シュヴァーピングに連れて行かれちゃいました。

巡査 名前は何というんだね？

K V ヴルトルブルムプフト。

巡査 ヴァトルシュトルンプフ？

K V ヴル トル ブルムプフト！

巡査 はつきり言いたまえ。髭の中でもぐもぐ言わんと。

K V (髭を引きはがす) ヴルトルブルムプフト。

巡査 何て馬鹿げた名前なんだ！ もう行ってよろしい。

K V (走り去る。だが戻ってきて、巡査に言う) あのう、巡査殿

巡査 まだ何か用かね？

K V 妹が巡査殿によくと言っておりました。

巡査 ありがとう。だが、本官は妹さんをまったく知らないが。

K V ちびで、のろまで。あいつをご存じないですか？ いや、逆を言って

しまったんだ。私は、うちの妹に、巡査殿からよろしくと伝えましょうかと、
言っつもりだったんです。

巡査 でも、本官は妹さんをまったく知らないのだ。妹さんは何て名前だ
ね？

K V やっぱりヴルトルブルムプフト。